

JASCE



学会ホームページ <http://jasce.jp>



058号(2020年11月24日)

目次

「第2回 オンライン協同学習カフェ」
開催のご案内
学会ワークショップについて
『協同と教育』への投稿募集中
各地区の研究会・勉強会
ショートレター(会員からの投稿記事)

「第2回 オンライン協同学習カフェ」開催のご案内

9月12日(土)に開催しました「第1回オンライン協同学習カフェ」には、32名の参加をいただき、ありがとうございました。久しぶりに皆さんとお会いできて、とても楽しく有意義な時間を過ごすことができました。

「ぜひ続けてほしい」という要望も

あり、研修委員会一同、やる気満々で準備を進めてまいりました。この度、「第2回オンライン協同学習カフェ」の準備が整いましたので、ご案内いたします。皆さまの参加をお待ちしております。

問合せ先: 研修委員会
(kenshu@jasce.jp)

第2回 オンライン協同学習カフェ

❖2020年12月5日(土)14時開会❖

話題提供：安永 悟、中村桂一郎、
小松誠和、原 樹(久留米大学)

LTD 授業モデルによる科目「協同学習」の
実践：2020年度前期の振り返り

日本協同教育学会 HP から申し込み(11/28 締切)
学会員でなくても参加可、参加費無料
申込サイトに詳しい説明資料あり

学会ワークショップについて

今年度の学会主催ワークショップについては、当面中止といたします。ワークショップの性格上、濃厚接触のリスクが高い活動を伴いますので、苦渋の決断をいたしました。ワークショップ再開の時期につきましては、研修委員会でご慎重に検討の上、改めてご案内させていただきます。

「Zoom:オンライン協同学習カフェ」は、認定トレーナー養成を目的としたワークショップです。協同学習の考

え方と技法に習熟したい方や、オンライン授業で双方向的な学びをどう実現するかにお悩みの方にお勧めです。

『協同と教育』への投稿募集中

『協同と教育』への投稿を随時受け付けています。投稿受理から査読を経て採択が決定されるまでに通常数ヶ月以上を要します。学会機関誌『協同と教育』第16号は2021年3月発行の予定です。みなさまの積極的な投稿をお待ちしております。

各地の研究会・勉強会

(大阪地域)

協同学習を用いた看護教育研究会
◇11月15日(日)14:00~16:00
にオンラインで開催し、23名の方が参加されました。沖縄県、熊本県、岡山県、大阪をはじめ関西各県、名古屋、東京都、千葉県などからご参加いただき、そのうち新たに2名の方が参加されました。「コロナ禍の中で、いかに協同学習を実践していくか、現況と今後に向けた工夫」について、時間をかけてディスカッションしました。勤務校のハード面、学生の特徴、教員仲間の取り組みも多様な中、「協同学習で育みたいこと」を見失わず、粘り強く頑張っていこうという、熱意と工夫のチャージができました。

◇次回は2021年1月に開催します。日時は1月のご案内でお伝え致します。

私たち看護職は皆様のご健康を日々祈っております。これからは特に、「換気」が大切なポイントです。空気をきれいに保つ工夫で、お元気に新年をお迎えくださいますように。

来年もよろしく願い申し上げます。

企画運営：緒方巧(梅花女子大学看護保健学部 t-ogata@baika.ac.jp)

(岡山・中国方面)

協同学習研究会

◇岡山での今年度第2回協同学習研究会を下記の日程・内容にてオンラ

JASCE

インで開催します。今回は東原猛流先生（瀬戸内市立牛窓西小学校）による算数（小学3年生）の実践のご発表です。若く意欲的な東原先生のお取り組みにご期待ください。

第1回と同様、授業実践の動画をYoutube Liveにより配信し、その後、Google Meet（もしくはZoom）による協議を行います。オンラインの方が、遠方にお住まいの先生方にも容易にご参加頂けることを、前回、実感致しました。対面開催の良さは拭いがたくありますが、オンラインの可能性も追求してまいりたく思っております。ふるってご参加ください。

期日：2020年12月5日（土）

14時00分～17時30分（予定）

講師：東原猛流先生（瀬戸内市立牛窓西小学校）

校種・学年：小学3年生

教科・単元等：算数・「円と球」（啓林館（下）P7）

◇以下、参加申込方法等です

px5106ji@s.okayama-u.ac.jp 宛に下記にしたがって参加の意思表示をお願い致します。

1. メールの件名を「第2回協同学習研究会参加」として下さい。
2. メールの本文にお名前とご所属ならびに「参加」と明記して下さい。
3. 11月28日（土）までにお知らせく

ださい。当日の配信 URL やミーティング ID は、参加をお申し込みいただいた方にもお知らせします。

◇次回の開催予定

今年度最後の研究会は2021年2月27日（土）14時～17時30分、オンラインにて開催します。詳細が決まり次第、お知らせします。

連絡先：高旗浩志
（岡山大学教師教育開発センター takahata@okayama-u.ac.jp）

（福岡・九州方面）

授業づくり研究会

◇通算50回目の「授業づくり研究会」を11月14日（土）の午後にオンラインで開催しました。スケジュールは次の通りでした。

○事前オープン 13:30～14:00

(1) 挨拶・導入：安永悟・久留米大学 14:00～15:50

(2) 講演：鮫島輝美・京都光華大学 14:35～15:50。演題「関係からすべてがはじまるー新しい人間観からみる協同教育の可能性」。

(3) 協同教育カフェ：須藤文・久留米大学 16:00～16:50

(4) 連絡・閉会：安永 16:50～17:00

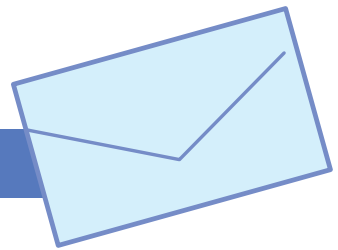
○オンライン情報交換会 17:00～17:30

◇今回の事前登録者は78名でした。いつものように全国からの参加がありました。参加者の所属と専門は多様でした。またWeb開催ということもあり、初めての参加という方も、いつもより多かったようです。当日の参加人数は、途中での出入りがありましたので、明確ではありませんが、瞬間最大参加人数は69名でした。また、情報交換会には37名が参加しました。

鮫島先生によるガーゲンの社会的構成主義は大変魅力的な内容で、今後の協同教育を考えるうえで、参考になる視点が沢山ありました。今回の講演をきっかけに、新たに「ガーゲン研究会」を立ち上げる方向で話が進んでいます。須藤先生に進行をお願いした「協同教育カフェ」も好評で、グループごとに熱のこもった対話が展開しました。その一端は全体交流の場で共有することができました。

今回の研究会はWebによる初めての開催でした。新しい時代の新しい研究会をどうにかスタートすることができました。今後も、参加者の皆さんと一緒に、新しい研究会を模索していきたいと思っております。

連絡先：安永悟（久留米大学 yasunaga_satoru@kurume-u.ac.jp）



「敬意と協同学習」

犬山市の小学校1年生担任のM先生の授業では、一人ひとりの子どもに「〇〇さん」と呼びかけています。子ども同士も、意見交換の折には、互いに「〇〇さんは・・・」という風に「さん」づけで呼び合います。こういう姿は、協同を基盤に置いた授業ではほかにしばしば見ることができま

す。そういうクラスでは、子どもたちは学習に向かう自分の挑戦の気持ちを素直に出せているように見えます。子どもたちには、教師からの、そして仲間相互の認め合いが感じ取れているのです。

「さん」づけで呼び合うという技法が大事だということではありません。その背景にある、互いの成長意欲への敬意が重要だと思うのです。とりわけ、教師から子どもへの敬意は重要だと考えます。それが学級の文化に反映されていきます。精一杯成長に向かおうとしている子どもたちは、敬意を払うに値する対象です。

私は以前、日本では尊敬に対してどのような態度、行動がとられるかを調べたことがあります。アメリカ合衆国や中国と比較して、他者を尊敬するという意識は明らかに低いことが分かりました。対人関係で同様の興味ある結果を指摘しているのが山岸俊男氏の信頼研究です。彼の調査では、尊敬と同様、日本人は他者を信頼する態度が合衆国と比べて明らかに弱いのです。

日本人には、一歩踏み込んだ人間

関係を結ぼうとしない文化があると推測できないでしょうか。「和気あいあい」という言葉がありますが、それは心の底からの信頼や敬意が裏付けとなっているのでしょうか。

ほぼ単一の民族、ほぼ共通している文化の下で、日本人は真情を伝え合うことなく、形で付き合う安易な人間関係を良しとしてきた可能性があります。他者から敬意を払われ、胸を開いた信頼で結ばれるという経験がなければ、自尊感情が形成されることも無いように思います。山岸氏は日本人が信頼だと思っているのは単なる「安心」に過ぎないと言っています。同様に、日本人が尊敬と思っているのは「敬語の使い分け」という形にとどまっていたり、時には「迎合」「付度」「遠慮」といった行動と結びついたりしている可能性があります。暗黙の文化を自分と共有していない人たちに対して排斥的な態度をとりがちなこと、このあたりと関係がありそうです。

協同学習は、学習仲間全員の成長を目標とするものです。出発点は、自分はもちろん、仲間全員が成長への意欲を強くもっているという認め合いです。成長に向かおうとする仲間への敬意がなくてははじまりません。

日本の教育文化には、習得の程度だけを物差しとした比較と序列づけが、いまだに強く根付いています。それが一人ひとりの子どもの多様な可能性を壊してきました。子どもたちの意気を削ぐこのような文化は、重大な人材の損失を呼んでいたことに気づくべきです。協同学習で授業を進めていく

に際しては、グループ技法の活用にとどまるのではなく、理論の根底にある協同の意義を理解する必要があります。

冒頭の実践では、子どもたちが認め合い、精いっぱい学ぶ楽しさを促す基本が押さえられています。現状の学校教育では、その押さえの出発点は教師です。一人ひとり個性をもったかけがえのない子どもへの敬意を一貫させることが大事だと考えます。

なお、ここでは尊敬研究の紹介では尊敬という言葉を使いましたが、教育場面では私は敬意という言葉のほうが適切のように感じています。「尊敬」は下から上へというニュアンスがあるのに対して、「敬意」は双方向のものとして理解できるように思うからです。

敬意はもちろん、教師集団の間でも大事です。若い教師とベテランの教師、管理職が認め合う学校でこそ職員の本領が発揮されます。研修会に向う研究者と実践者の関係も同様です。耳に心地よいコメントを重ねるだけの講師にはおそらく現場への敬意が足りないのだと思います。敬意をもちあってこそ、本音も言い合えるのだと思います。

文献：

山岸俊男 1999 安心社会から信頼社会へ 中央公論社(新書)

杉江修治 2006 日本における尊敬の社会心理学的検討 中京大学教養論叢 47-1, 245-264.

(中京大学名誉教授
杉江修治)